

兵庫県将来構想研究会 第5回会議 議事録

1 日 時：令和2年3月26日（火）10：00～12：00

2 場 所：兵庫県民会館 10階「福の間」

3 出席者

委 員：阿部委員、石川委員、織田澤委員、加藤座長、笹嶋委員、
永田委員、中塚委員、服部委員

ゲスト：関西大学社会学部 草郷教授

県 側：水埜政策創生部長、池田計画監、守本局長、木南課長、岩切副課長
大町班長

4 内容

(1) 水埜部長挨拶

- ・ 今日とは年度末のお忙しい中、またコロナの問題が収束しない中でお集まりいただきましてありがとうございます。
- ・ コロナウイルスにより、ついにオリンピックも延期となってしまいました。本県も先週までは全国で一番発症数が多かったのですが、中心がどうやら東京のほうに移ったようでございます。
- ・ この病気、冷静に考えると中国のWHOの調査でも致死率、医療体制が整ってからは0.7パーセント程度。だから、サーズやマーズと比べたらずっと低いですし、国内でも8割ぐらいの方は軽症で済んでいるので、医療体制さえしっかりしていれば恐れることはないのかなと思いつつも、本県では4つほどクラスターができてしまいましたので、クラスターの管理とあとは感染源の調査をしっかりとして押さえていっているような状況でございます。
- ・ 一方で移動自粛の影響で、時差通勤とか、テレワークが急に増えてきてまして、うちの関係しているFOCUS財団でもリモートアクセスが3月になって急増してきました。多分、外に出られない研究者の方々がスーパーコンピューターにつないで研究をされているのかなと思うのですけれども、思わぬ増収・増益になりました。
- ・ そういった意味で、数年たったら令和2年というのは、働き方改革の元年だったなど言われるのではないかと思います。14世紀のイタリアでもペストが大流行して人口の二、三割が失われたけれども、その結果何か生産性が高まったのかもしれませんが、ルネッサンスという文化・科学の熟成の時代を迎えた。我々もそういった災いの後に、明るい方向性を見出せたらと思っております。その一つが、我々の新しく検討するビジョンでもあるのかなと思っております。
- ・ 前置きが長くなりましたが、今日は議題としてその新ビジョンの今後の進め方と、この研究会の予定、それから新ビジョンの検討の方向性ということで、その素材として県民意識調査のこれまでの振り返りを用意しております。
- ・ この県民意識調査は、今のビジョン、2001年に策定してから、そのフォローアップを行うために、毎年5,000人を対象にして55項目の調査をずっと継続してやってきてお

るものです。この調査結果を俯瞰して、県民の皆さんの意識に、どういう傾向や変化が起こってきたかというのを分析したものでございますので、これを素材にして、特に今後深掘りするようなテーマは何かといったことについて、意見交換をしていただけたらなと思っていますところでございます。

- ・ 今日、この意識調査にも深く関わっていただきました草郷先生にも御出席をいただいております、いつものとおり忌憚のない御発言をよろしく申し上げます。時間が足りなくなるかもしれませんが、またよろしくお願ひいたします。

(2) 配付資料説明

[事務局（ビジョン課木南課長）]

- ・ 私から本日の主な論点、新しい将来ビジョンの検討の進め方、当研究会の今後の予定などについて御説明をさせていただきます。
- ・ 資料2を御覧ください。まず簡単に新ビジョンの検討の進め方を説明させていただきます。
- ・ 1ページ目の「3 想定する新ビジョンの姿」ですが、現行ビジョン同様、「全県ビジョン」「地域ビジョン」と2本立てで策定をしようと考えております。「(3) 新地域ビジョンの性格」に記載をしております新地域ビジョンの策定単位ですが、原則として県民局・県民センター単位のところで9地域で策定しようということで、現在調整中であります。
- ・ 2ページ目を御覧ください。「4 新ビジョン検討の進め方」です。「(1) 将来構想研究会」につきましては、来年度も今年度同様の体制で設置をさせていただきます。よろしく申し上げます。
- ・ 3ページ目の「エ) 今後の予定(2020年度)」です。計10回程度の会議を本研究会では開催をしたいと考えております。そして、一応年末を目標にしておりますが、新全県ビジョンのたたき台となる将来構想思案を取りまとめていただくということでお願いしたいと思っています。
- ・ 「(2) 長期ビジョン審議会」、こちらのほうは体制をできれば大きく改組をいたしまして新たに設置をし、新ビジョンの策定の審議機関ということで運営をしていきたいと考えております。こちらの審議会の本格検討は、当研究会の取りまとめに当たります将来構想試案を受けて、審議会の中に小委員会を設置して、本格検討を行うということで進めていきたいと考えています。
- ・ 一方、地域ビジョンでございますが、「(3) 新地域ビジョン検討委員会」ということで、地域ごとに委員会を設置いたしまして、地域ビジョンの検討を始めてまいります。
- ・ 「(4) 県民との意見交換」でございます。ここに記載をしておりますワークショップ方式での「ア) 地域デザイン会議」、車座形式での「イ) ビジョンを語る会」、また高校や大学などへの「ウ) ビジョン出前講座」、あとはビジョンの検討状況を広く知っていただいて意見を頂くという場の「エ) 未来フォーラム」。こういったさまざまな形で県民、事業者、地域団体との意見交換会を開催してまいります。

- ・ 4 ページ目を御覧ください。更に、「②SNSの活用」であるとか、「③県民意識調査の実施」「④ヒアリング調査の実施」などを予定しております。
- ・ 「5 全体スケジュール」ですが、将来構想研究会につきましては、目標としては年末頃に、粗い形でもよいので一応のアウトプットを出すということで考えております。と申しますのも、この地域ビジョンのほうですが、全県の大きな方向性を踏まえて、本格的に地域ビジョンの検討を進めていただきたいと思いますと思っております、この将来構想研究会のアウトプットを受けて、本格検討を始めるということにしたいので、少しタイトですけれども、年末ぐらいの目標にさせていただいております。
- ・ 次の資料 3 でございます。当研究会の今後の予定でございます。来年度は、おおよそ月一回ぐらいのペースでテーマ別検討を進めていきたいと考えております。今日は、そのテーマ別検討の導入部の会議ということで、どんなテーマ別検討を行っていったら良いかということについて、御意見を頂きたいと考えております。年末に取りまとめの議論を 2 回ほどさせていただくという予定でございます。
- ・ なお、4 月のテーマ別検討は、移動・交通をテーマに実施するというので、もう既に予定をしておきまして準備を進めているところでございます。タイトな日程にはなりますが、御協力よろしくお願いいたします。
- ・ 次に、資料 1 に戻ります。「本日の主な論点」です。これまでの検討で全地域分散型とも言うべき、いろんな場所であっても豊かな暮らしが可能な兵庫といっためざすべき方向性がおぼろげながらですが見えてまいりました。来年度は、こうした方向性をもとに、将来像を具体的に描き出していく。その切り口となるテーマを設定して検討していきたいと思っております。
- ・ そこでメインの論点は、「今後深掘りすべきテーマは何か」ということです。これまでの議論でもあったように新ビジョンは、なりたい姿を思い切って描くもの。この視点を踏まえまして、来年度、本研究会で検討を深めるべきテーマとして、後ほど御説明する資料に事務局としてのテーマ案を整理しております。他に適当なテーマがないのか、また、そうしたテーマに関する将来の見通し、あるべき姿についてどう考えるのかといったことが今日のメインの論点です。
- ・ 関連の論点として 2 点提示をさせていただいております。1 つ目が「県民の価値観の変化と行方は」ということで、県民の価値観は今後どのように変化していくのか。そこからイメージされる社会の姿はどのようなものか。また、全地域分散型になじむような価値観に変わっていくのだろうか。また、どういった価値観、考え方を伸ばしていく必要があるのかという点が関連の論点 1 です。
- ・ 関連の論点 2 ですが、「県民の『不安』解消は可能か」ということです。今回、意識調査の分析を行った結果見えてきたのが、不満はないが不安はあるという県民の姿でありました。こういった状況は当たり前のことだ、という捉え方もあるとは思いますが、そうではなくて、これは望ましくない状況であり、解決していくべき課題と捉えるのであれば、私たちは何をしたらいいのか。どのような社会を構想するべきか、といったところについても御議論いただければと思っております。

[事務局（ビジョン課大町班長）]

- ・ 私のほうから「県民意識調査から見る新ビジョン検討の方向性」ということで、資料4を御覧ください。こちらは、現行の長期ビジョンの推進状況を評価するために活用してきた県民意識のアンケート調査でございます。18年間にわたって蓄積してきたデータを、改めて俯瞰して県民意識の分析を行いました。
- ・ この資料の趣旨でございますが、先ほどもございましたが、この後に議論いたします新しいビジョンに示すべきテーマ、あるいは今後優先的に検討すべきテーマの検討に当たってキーワードを抽出しようというものでございます。アンケートの文言がちょっと年代によって変遷しておりまして、厳密に有意性が保証されるものではないのですけれども、テーマを検討する議論の糸口にする、という趣旨で御覧いただければと考えております。
- ・ 県民意識調査の概要ですが、1ページ目の左ページ中段でございます。詳細は記載のとおりでございますが、二十歳以上の県民5,000人を無作為に抽出いたしまして、右のページの一覧表でございます55問でアンケートを行っております。
- ・ 質問の分類ですけれども、表にございますとおり「4つの将来像」と、「12のめざす姿」ということで質問を分類しておりまして、それを全体評価ということで3つの質問で総合評価を行っております。全て「そう思う」という項目から「そう思わない」というところまで5段階の選択肢で構成しておりまして、今回の分析に当たっては、5点満点の回答を平均化して、その傾向を分析しております。
- ・ 資料の構成でございますが、左下の構成を御覧ください。「将来像別の経年分析」、これは4つの将来像ごとに中長期のデータを見ながら地域別、年齢別などの分析を行って新ビジョンにつながる傾向を記述しております。
- ・ 2つ目は、「地域別レーダーチャート」です。地域や将来像ごとの特徴も少し大括りに俯瞰しております。
- ・ 最後に「まとめ」といたしまして、以上の分析で抽出したキーワードを基に、次回以降、この研究会で議論するテーマを事務局案として提示しております。
- ・ 別冊としまして、本日、詳細はご説明いたしません、参考資料を御用意しておりますので、また御覧いただければと思います。
- ・ では、以下キーワードに関連する部分を中心にポイントを絞って御説明させていただきます。2ページを御覧ください。
- ・ まず、経年分析の1つ目は、「総合的満足度」です。総合的な豊かさを問う3つの質問をしておりまして、ここで見えてきた傾向ですけれども、日常生活への満足感、今の地域に住み続けたいという思い。それから不透明な将来に対する不安ということが見えてきました。左ページの中段の積み上げ棒グラフを御覧ください。今の生活に満足していますかという問いでございますが、約7割の方が「5満足」「4まあ満足」というポジティブな評価をしてございます。地域別のグラフでは、やや都市部のほうが高い傾向にございますが、身近な暮らしの実感としては、全県的に一定の満足感が示されているというところでございます。

- それから、右ページ、上段の積み上げグラフを御覧ください。これは、住んでいる地域にこれからも住みたいかという問いですが、約 4 割の方が最高点を付けておまして、先ほどの生活満足度よりも顕著な値が出ております。地域別には、若干都市部が高いというふうに言えるのですけれども、人口減少の大きな多自然地域でも多くの方が住みたいというふうに評価していることが特徴でございます。アンケートですので、一定のバイアスが掛かっているというのがありますけれども、そういった特徴として評価してございます。
- その下ですが、一方で将来への不安の質問に関しては、景気動向と連動して緩やかな改善傾向も見られますけれども、それでも一貫して厳しい認識が示されています。先ほどは、より身近な暮らしの実感でしたけれども、少し視線を将来に向けたときには、経済情勢ですとか、雇用とか、社会保障制度の変革、技術革新など見えない社会の変化への不安感が現れているものと考えます。こうした不安に答えられるビジョンを検討できたらというふうに考えてございます。
- では、3 ページを御覧ください。この「I 創造的市民社会」の категорияは、人のつながりや自分時間の充実、それから人づくりというところの categoria でございます。ここで見えて来たのは、家族やコミュニティーの在り方への示唆。それから暮らしや子育てなどにおける地方、都市それぞれの強み・弱みと格差でございます。
- 左ページ中段の折れ線グラフを御覧ください。家族とのコミュニケーションが取れているかを聞いた質問ですけれども、家族の単位が小さく個化していく社会の中で、年代による多少のばらつきはありますが、非常に高い数値が出ているというところは面白い特徴だと思っております。
- 次に、その下の左側の地図。これは、地域のつながり・支え合いといったところを問う質問ですが、この地図は高い数値に行くほど黄色、悪い数値のほうが紫ですけれども、地方のほうがコミュニティーのつながりが強いという黄色が集中しているというところ です。
- 一方で右側は、高齢者が暮らしやすいかという問いに対しては、やはり利便性の高さから都市のほうが暮らしやすいという結果が出てございます。今後も精神面でのつながりや物理的な面での支え合いをいかにカバーしていくか、新たな家族やコミュニティーの形を考えていかなければならないと考えております。
- それから、右ページ。こちらは、目的を持った学びをしているかについて、右上の地図を御覧いただきたいのですが、こちらは、やはり学びの機会が充実した都市部に黄色が集中してございます。
- それから、人づくりといたしまして右下の 2 つの地図・グラフを御覧ください。まず、左側。子育てがしやすいかを問う質問に関しては、塾や教育施設など、またアクセスなどが充実している都市部に黄色が集中してございます。一方で子供が伸び伸びと育っているかを問う右の地図では、逆に自然が豊かであったり、ゆとりのある地域のほうが黄色が強く出ているという状況でございます。

- それから、その上でございますが「若者が希望を持てる社会か」を問う設問ですが、これを地域別に見ますと、若者の希望と雇用情勢というところで高い関連性が示される中で、地域別で見ると仕事の選択肢の豊富な都市部のほうが高いという結果が出てございます。
- 4 ページを御覧ください。この章は、産業と仕事に関するカテゴリーでございます。ここでは、産業や雇用環境への厳しい意識、起業・創業へのハードルの高さなどが見えてきました。左ページの2つの将来像は、共に地域の産業や企業の活力、あるいは事業を始めやすい環境にあるかなどを尋ねた設問です。いずれも平均点は2点台と厳しい認識が示されています。これから、どのような産業を育てていくのか。また2050年の産業は、どのような姿をしているのか。ビジョンの中で示していく必要があると考えています。
- 右ページの上段は、仕事に関する質問でございます。真ん中の地図グラフを御覧ください。仕事のやりがい、あるいは仕事と生活の両立を問う質問ですけれども、但馬、丹波、淡路などの地方のほうに高い値を示す黄色が集中していることが分かります。一つの仮設ですけれども、自分で事業を興しているような自営業のウエイトが高いのが但馬、丹波、淡路でございます。仕事のやりがいといった要素に、こうしたことも影響しているのではないかと推察を記述しております。
- AIが人の仕事を奪うというようなことが話題になったりもしますけれども、逆に技術を駆使して、誰もが自分がやりたい事業を興していくというような姿がもし描けるのなら、夢のあるビジョンになるのではないのかなというふうに考えています。
- 5 ページを御覧ください。この章は、自然との共生、低炭素社会、防災のカテゴリーでございます。ここで見えてきたのは、環境保全や防災意識のまばらな状況でございます。左ページ中段の折れ線グラフですけれども、地域の自然環境が守られているかという問いに対しまして、悪い数値ではないのですが、やや低下の傾向が見られます。
- 左ページ下段の折れ線グラフはリサイクルに取り組んでいるかを聞いております。全県的な取り組みの定着が示される一方で、男女や年齢別では取り組みの意識がまばらな状況が伺えます。また、グラフは載せていませんが、再生可能エネルギーの利用状況を聞いた設問では、全県的に2点台半ばとまだまだ活用が進んでいないという状況でございます。
- 右ページ中段の折れ線グラフは、防災です。東日本大震災以降、地域での防災活動の取組は一貫して活発化していますが、一番高い値の但馬地域と低い阪神南地域で1ポイント以上の差が見られます。都市と地方での格差が見て取れるということでございます。これは、地域での人のつながりを聞いた別の設問でも都市と地方で同じような傾向が示されておりまして、地域コミュニティの強さとの関連性が伺えるということでございます。
- 続きまして、6 ページを御覧ください。最後のカテゴリーですが、生活の利便性や地域への愛着、地域活動の取組、世界との交流ということを含んでおります。

- ・ 左ページの中段の折れ線グラフですけれども、買物・通院の利便性を聞いております。これは、当然かもしれませんけれども、都市部のほうが高く、地方のほうが低いということで、真ん中に大きな溝が現れていることが分かります。
- ・ 一方で県内のどこへも便利に移動できるかという質問に対しましては、地方部でも改善傾向が示されています。中段の地図ですけれども、県庁からの移動時間を色分けしております。今と 30 年前を比較しておりますけれども、道路延長の広がりと共に同じ時間で移動できる距離というのは大きく広がっているということが分かります。
- ・ 次に左下の折れ線グラフを御覧ください。地域への愛着や誇りは、総じて高い数値で推移しており、近年上昇傾向が見られます。
- ・ また、右ページ中段のグラフですけれども、地域活動への参画への状況を聞いております。こちらも但馬、丹波といった地方に高い数値を示す黄色が集中してございます。
- ・ 右下の折れ線グラフは、こちらは世界との交流を聞いておりますが、海外に出掛けたり、海外で生活してみたいかという問いに対しまして、若者の海外志向の低下が見られます。この設問の評価はちょっと難しいのですが、今後世界で活躍する人材を育てていくためには、若者の外向き志向をいかに高めていくかというところも考えなければならぬと考えております。
- ・ 7 ページを御覧ください。これまでが各将来像ごとの経年分析ですが、ここでは地域別のレーダーチャートを作成しまして、もう少し俯瞰して特色を見ております。少し乱暴かもしれませんが、ここでは将来像ごとの複数の質問の点数を平均化しまして地域別に集計して、地域差の大きいカテゴリーを抽出しております。地域差が比較的大きなカテゴリーといたしましては、「10 住環境」「12 国際」「4 未来を拓く産業」ですけれども、特に顕著だったのが 10 番の住環境です。ここで言う住環境は、主に買物などの生活の利便性という意味での住環境ということで、ちょっと偏りがあるのですが、神戸、阪神南、阪神北といった都市部のレーダーチャートを見ていただきますと、やはり他地域よりも突出して差が出ているというところが見て取れます。当然といえば当然なんですけれども、こういう差が出ている。一方で生活利便性は今後地方でも飛躍的に改善していくということは見えてきておりますので、2050 年の姿をどう描けるか検討の大きな要素になるものと考えております。
- ・ 8 ページを御覧ください。最後にまとめてございます。これまで見えてきたキーワードを基に、今後研究会で深掘りするテーマを書き出しました。大きくは、青い帯にございます 4 つの分類にまとめております。その中の丸数字の見出しは、県民意識調査から見えてきたキーワード、その下に検討の内容を記載しております。
- ・ 1 つ目は、「都市・地方の暮らし方の再構築」でございます。①としまして、意識調査からは、住環境、特に生活利便性の意識の格差ということと、逆に住みたいという地域への思いは、どの地域でも強いというようなキーワードが見えてきました。②としまして都市部でのコミュニティの低下と地方の子育て環境の不安など、都市と地方のそれぞれの強み、弱みが見えてきました。今後、モビリティや通信技術の進歩が空間の距離を劇的に縮めるというところまでは確実に見えておりますが、都市や地方での暮

らし方、働き方、コミュニティや家族の形がどんな姿に変わるのか、ビジョンではそういったことを県民に示すことができると考えております。

- ・ 2 つ目は、「A I時代の稼ぎ方と人材育成の展望」でございます。県民意識調査からは、産業・雇用環境への厳しい認識、起業・創業へのハードルの高さが見えてきました。②としましては、若者の希望を描く、それから「学ぶ」ことに対しての環境の格差を上げております。2050年は、産業構造はどのように変化しているのか。兵庫は、何を強みとして何で稼いでいくのか。そして、そのためにどんな人材が必要とされるのか。また、人々にとって学びがどうライフスタイルに溶け込んでいくのかといった姿を見出しければと考えております。
- ・ ③では、若者の海外志向の低下、地域国際化の必要性を挙げております。2050年ということですので、もう既に国際化という言葉が陳腐化しているのではないかとという視点もあるかと思えます。世界との関わりといった観点で御意見をいただければと考えております。
- ・ それから、3 つ目は「人生 100 年時代のライフコースの提示」でございます。意識調査からは、働き方や社会保障、格差、技術革新などの社会の変化に対する不透明感が見えてきました。これは、先ほどの産業の項目とも大きくクロスする部分かもしれませんが、働くスタイル、それから企業との関係、幸せなライフステージの歩み方のビジョンを考えていければと考えております。
- ・ 4 つ目といたしまして、「巨大災害や気候変動への対応」を挙げております。防災では、一定の意識の高まりが見られる中で、いよいよ南海トラフ地震が起きた後のまちづくりをどう考えていくのかといった新たなステージを迎えているという可能性もあります。環境につきましては、2050年の気候変動は、どんな社会変化をもたらしているのか、そうした姿も示せればということで挙げさせていただいております。
- ・ 以上、駆け足でございましたが、意識調査から抽出したテーマを記述させていただきました。これに限らずさまざまな視点があるかと思えますので、御議論のほどをよろしくお願ひしたいと思えます。以上です。

[ゲスト]

- ・ 手短かにコメントさせていただきます。まず、「兵庫の豊かさ指標」を作るに当たって、県民意識調査の構成は 3 つのパートに分かれ、1 つ目のパートが「あなた自身のこと」、パート 2 が「住んでいる地域や市町のこと」、パート 3 が「社会全体のこと」について聞くという構成になっています。それらのデータをビジョンの 12 のめざす姿と、どの指標がどう組み合わせるかを因子分析を用いて行いました。県民の意識を個人レベルと地域レベルと社会レベルの 3 つのレベルからしっかりと考えることで、兵庫県のビジョンの取り組みがどう進んでいくのかを確かめていけると考えたからです。
- ・ 「指標」はツールであり、そのツールの目的が何かということが大事になってきます。新ビジョンにも指標を作る場合には、ビジョンと指標の二つの間がどう関係するのか、意味があるものなのかをしっかりと考えて作らないといけないことを補足しておきます。

- ・ 私のコメントは、大きく二つです。1点目は、指標に関係するものです。そもそも指標はツールと申し上げましたが、長期ビジョンを作ったのは、確か貝原知事の時代だと思うのですが、これからの社会づくりには行政が長期計画を作って、それを回していく時代は終わりで、そうではなく県民がしっかりと自分たちのまちをつくっていく、そこに行政と一緒に関わっていくという考えが原点にあったと思います。この原点があったからこそ、主観的なデータを重視していくことにつながったのだらうと、解釈しています。
- ・ 主観的データを取っていることの強みは、行政、県民が関われる可能性があるということです。つまり、自分の声がどう届いたのか、それを整理するとどういう形で現れてくるのか。例えば、「満足度」といったとき、自分の満足度はわかっていても、自分の周りの地域の皆さんも同じくらいなのか、あるいは結構違うというギャップがあったりすると、はっとしたりするという効果があると思います。ですから、主観的データを取っていくということは素晴らしいことであって、今回のビジョンの見直していくに当たって、これをどう生かしていくのかにぜひ力を入れていただきたい。
- ・ 主観的データは、より具体的に住民自身が何に取り組んだらいいのか、何に参画しようか、一緒に何かを始めてみようかという、いわゆる個々の活動の方向性を考えたり、活動をサポートする役割を担えると思います。ここで議論されている全県ビジョンの役割は何なのかということが大事になってくると思います。
- ・ 7年前にビジョンの改訂をしたときに、全県ビジョンの位置付けと地域ビジョンの位置付けを議論しました。全県ビジョンはどちらかというといく兵庫県民がどこで生活しているても、ある程度基礎的な生活状況を担保できるかどうかという点が重要ということで設計していたと思います。地域ビジョンは、例えば分かりやすい例で言うと、但馬ビジョンと但馬力指標です。但馬地域にとっての地域資源は何なのかを踏まえた地域ビジョンを持ち、それに根差した指標を作ることで、地域の住民自身が当事者としてどう地域を変えていくのかということを見つけ出してほしいし、その見つけ出した活動を行政が応援していくという組み合わせです。
- ・ 長期ビジョンは、理念として「参画と協働」を掲げてきました。これが成功するかどうかは、恐らく主体者である県民の中でどこまで本気になる人が増え、取り組みにつながっていくのかということにつきると思う。そういった意味で言うと、先ほども申し上げましたが、主観指標をどう活用するかを是非考えていくことが大事だと思います。
- ・ これまでのビジョンの取り組みが成功したか失敗したか、おそらく両面あったと思います。指標を目的実現のツールとして設計し、その結果、ビジョンと行動を結ぶ仕組みづくりができていくのであれば、それには可能性を感じるというのが1点目です。
- ・ 2点目は、主観データを活用するときに留意すべき点です。一つは、人々の行動とか状態を質問の中で押さえています。例えば、かかりつけの医者がありますかとか、あるいは何かボランティアしましたかとか、地域の農産物を買っていますかとか、そういう類いのものです。もう一つは、県民の認知というか価値観を捉えています。主観データを種類分けして捉えて活用することが大事という点が一点と、今回の主観データはパネル

データではないのです。ですから、大きな傾向として把握できるかもしれないが、そこからいわゆる統計的な有意性というのは導き出すことがなかなか難しいという点には注意しなければいけません。時系列で地域ごとにどう変化したかを追っていくことには大きな意味があると思います。全县ベースで、例えばいわゆるランキング的な使い方をするのはちょっと危険で、そうではなく、地域ごとに、淡路地域ではどう変化したのか、神戸地域がどう変化したかという議論は、とても有効と思います。

- ・ 3点目は、今日御説明いただいた資料、すごくいい資料としてまとめられたなと感謝しています。それを踏まえた上で3つあります。1つ目は、今申し上げたデータの件です。新ビジョンに関する主観データを集める場合、その中で半分ぐらいでいいので、パネル化できたらいいのではないかと思います。それがあれば、主観データの利用しがいがあるだろうと思います。
- ・ 2つ目は、質問票の中で、県民の行動行為・状態についての質問文を見ていると、やっぱりいわゆる社会的共通資本と言うのでしょうか。基本的な生活に密接に関係するような項目、例えば医療、教育、経済的基盤、こういったものについて、脆弱な地域があったときには、それは、地域に関係なく、しっかりと担保していくということが大事なのではないか。データを取るのであれば、データの中でも重要度の高いデータとそうでないものを分けた方がいいのかかもしれないと思います。
- ・ 3つ目は、7 ページ目のレーダーチャートです。このレーダーチャートを見ると、きれいに二つのタイプが出てきます。A型、B型でもいいですけど、都市型と地方型です。すごく参考になると見ていました。豊かさ指標も同じような指標化作業をしていたわけです。レーダーチャートを見ると、どの地域がどういう特性があるのかを見ることができます。新しいビジョンでどうなるか分かりませんが、地域性をしっかり捉える、そうするためのデータの使い方があるといいのかなと思います。それは、全地域を都市型に近づけるといふ議論ではなく、地方型に、ということでもなく、むしろ、どう組合せた方がいいのかという点も大事な視点です。
- ・ あと2つ目の大きなコメントは、今日はテーマについて議論されるということだったので、僭越ながら私のほうから感じたことを2つ申し上げます。一つは、「豊かな兵庫」の「豊かさ」というのは一体何なのかなということ。これからの時代を見据えたとき、「多様性」に着目するということが必要ではないかなと感じました。外国人との多文化共生もありますし、それからLGBTやこれからのライフスタイルの問題ももちろん含まれます。また働き方の多様性もです。「兼業の時代」とも言われているわけで、そういったものをやはり掘り下げていくようなことが大事なテーマではないかなと感じています。
- ・ 先ほどの類型の話に戻ってしまうのですが、都会型と地方型を突き合わせて検討してみる。どれが標準かというよりもそれぞれの形があるということをしつかりとビジョンの中でフレキシブルに見せていくのは意味があるのではないかと思います。なぜなら、個のレベルで地方と都市を行き来する生活というような選択肢も広がってきていると思うので、神戸に住んでいる人たちだけに自由度があるのではないと。播磨にいても、丹

波にいても、選択肢はある。阪神地域と自分の地域が生活の中でつながっていることが見えてくるようになったら、生き方の自由度が増すのではないかというふうに思えるわけです。そういう軸が一つあったらいいのではないかと。それは、制度的に、ダブル住民票を持っていいですよとか、そういう考えにもつながるのかもしれませんが。

- ・ 2 つ目は、事務局の説明の中で指摘された「国際化」の問題です。私はもともと途上国の開発問題にずっと携わってきました。MDG s は、SDG s という形に展開してきました。国際的目標は、国際的な課題を見据えているものです。これからの新しい社会像を兵庫県が考えていくときに、その国際的な潮流や課題と切り離して考えるということは難しいというか、切り離せないでしょう。接点を持った方がいいと思います。
- ・ 「SDG s」が取りざたされていますが、もともとは、国際的合意「アジェンダ 2030」です。このアジェンダが掲げているのは、「社会をどう変革していくのか」、「社会変革の目指すべき社会は、誰一人取り残さない」というメッセージなのです。また、気候変動問題や環境問題とも深く関わっています。これらの課題と今回の新しいビジョンとがどう組み合わせるのかが気になるわけです。是非、将来構想研究会の皆さんの中で一度もんでいただくようなことができたらいいと感じています。
- ・ 例えば、「あなたはごみを分別していますか」という質問があります。SDG s を活用すれば、そういうごみ問題がもっと違う視点から考えていける。環境問題で響いてくれるのがプラスチック問題です。プラスチック問題を持ち出すと、ごみを分別していますからというレベルで解決できる問題じゃないというところにいける。生産体制とか消費とか多くのことがどう構造的に結び付くのかにつながられます。新しい時代を拓いていくためには、そういう方向で視点を広げて検討していくようなことができるのではないかと思います。
- ・ ジェンダー問題を例にとると、男女間の平等・不平等ということだけでは終わらず、ジェンダーレンズ（視座）を持てば、それによって家庭における家事とか、地域における地域運営とか、職場における仕事の仕方とか、それらのことについても、ジェンダーへの取り組みでどう変化していくのかを考えていける。どういうメリットがあるのかという視点であり、新ビジョンの中で取り組んでいける可能性もあるのではないかと思います。
- ・ 「起業とか創業」が重視されていますが、それが人々の生活の質というか、生活の改革と結び付けて考えていくという視点がないと、単純に起業環境を整えたことで豊かというところは見えにくいわけです。ビジョンというのは、こういう課題を多面的に考えていける機会だと思っていて、そういった議論ができるのではないかと個人的に感じているということです。勝手なことを言いましたが、コメントです。

(3) 意見交換

[委員]

- ・ 確認で教えていただきたいのですが、調査の内容の標本の配分のところですがごく基礎的なことなのですが、10 県民局、500 の標本数を母集団構成比に応じて配分とい

うことは、基本的に農村部であれば農村部の人口の配分に応じてアンケートを配分している。例えば、年齢構成一つ取ったとしても。要は、その標本、地区それぞれの標本ということになるのですか。

[大町班長]

- ・ 毎年の評価に当たっては、地域の人口ごとに重み付けをして評価を行っているところですが、今回は地域別に見るというところで、その重み付けはしていません。毎年調査では、そのようにまとめています。

[委員]

- ・ 若干、こういう地図とかで見たときの怖さというのがあるなど。つまり、結局年齢の高い人たちのデータを見ているだけになっている。地域像を見ているわけではなくて、年齢の高い人たちだけを見ているという、そこら辺の本当のことを知っているのかなってということが気になったので確認しました。

[委員]

- ・ もう一つ確認なのですが、回収率はどれほどでしょうか。

[大町班長]

- ・ 約半分ぐらいです。

[委員]

- ・ 3つのブロックに分かれていて、先生の説明にもありましたけど、個人と地域と社会の中の社会の意味合いなのですが、この想定は、日本社会みたいな割と広く大きなものを想定してもらっているのか。それとも、その人が感じる、多分そっちだと想像しているのですが、その人が感じる社会というソサエティみたいなものを想定してもらっているのか。そこは、割と回答者に自由に頭の中で選択してもらって、つまり日本を想定する人もいれば、いや俺出たことないから近畿っていう方もいれば。

[大町班長]

- ・ 回答者の選択です。この調査票が届くだけなので。

[委員]

- ・ ちょっと読み方が変わってくるなと思ったので。日本はって考えると大分違いますよね。

[大町班長]

- ・ 確かにそうですね。

[委員]

- ・ 分かりました。

[委員]

- ・ 500 ずつということは、平均 10 県民局ずつで 500 ずつということなので、全体で見たときには農村部のほうが重く出ている平均という理解でいいんですよね。平均の扱いにする。そういう意味ですね。

[大町班長]

- ・ そうなります。

[委員]

- ・ 分かりました。人口で重み付けしていますよね。

[大町班長]

- ・ 毎年はやっています。今回はやっていません。

[委員]

- ・ この最後のレーダーチャートは、重み付けしていない。

[大町班長]

- ・ していないです。

[委員]

- ・ ランキングのようなのがかなり危険だというお話でしたけれども、これを見るとどうしても直感的にランキングしてしまいそうになるのですが、地域別の地図なんかは、何かそれをうながすような。この中でランキングの危険度という意味を改めて教えてください。

[ゲスト]

- ・ ブータンの指標づくりに関わってきましたが、日本の幸福度は何位ですかとかですね、とんちんかんな質問をいっぱいされました。それも見方としてはあるのですが、実はもっと面白い見方がありますよと、切替えしていました。指標の当事者性はすごく大事なことで、主観データを集めるという意味で先進国と言っているのがカナダ、オーストラリア、それからアメリカ。コミュニティーレベルでいろんな取り組みをしているんですね。もしかしたらそういう御指摘があるかなと思って、例としてちょっと持ってきたのですが、例えば、これはカナダのビクトリア市がまちのバイタルサインの冊子です。

まちの生体状態チェックみたいなものです。この中で、様々な指標を扱っていて、それらが果たして今どういうレベルなのかを、ビジュアルも含めて住民向けの冊子にしているんです。こういったものを個々の地域で作っていくことで当事者性を補完していく。ランキングも一つの目安になることがあると思う。例えば教育問題であれば、ある地域が劣っているようならそれは残念なことだし、できるだけ多くに教育機会にアクセスできるのがよいと思いますから。

- ・ 「自然環境」と言ったとき、例えば但馬、淡路の評価と、阪神南を一緒に比較されるのは無理があるのではないですか。だから、その辺をしっかりと使い分けていく。主観データと新ビジョンを使うと、県民自身が、自分の住む地域に対して関心を持っていけるようなツールになる、そういうふうに使っていくことが大事で、ランキングするなっていうわけじゃないのですが、当事者意識を補完するような仕組みはもっと大事ということです。

[委員]

- ・ むしろ地域の中で住宅満足度というものがあつたとしたら、その構造をきちんと地域ごとに把握していくというふうなことに使うということですね。

[ゲスト]

- ・ そうですね。アメリカのテキサス州のオースティン周辺のデータですが、ダッシュボード化していて、コミュニティーごとの個別ビジョンに対してコミュニティー単位での指標がどうなっているのかを見せています。それに基づいて「何ができるのか」ということをしっかりとみんなで考えていくような仕組み。それがどう動いていったのかを見ていく。そういう循環プロセスがある。こういう仕組みを構築していけば使い勝手がいいし、より広く、アクセスできる。ランキングにとらわれず自分たち自身がどう未来を拓いていくか、それが大切だと思う。

[委員]

- ・ ありがとうございます。いかがですか。

[委員]

- ・ こういうデータを見る際に、私はどちらかと言うとビジネスというか経済経営系の人間ですが、企業の中で例えば満足度調査とかをやることが多いんですけど、そのときに例えばこの最後のレーダーチャートが分かりやすいしやります。すごく意味がある、主観データもすごく大事だと思っている人間なので。
- ・ 他方で、これをクラスタリングとかクラスター分析のようなことをすると、個人のパターンが大分違います。つまり、ある項目についてすごく満足している人とすごく不満な人がいて真ん中になっている項目と、みんなが真ん中で真ん中になっているものと、平均値化するとそれって一個の図になってきちゃうわけですけど。何かこれは地域

差である平均値ですね、地域ごとの平均を求めているのですが、というよりもむしろ地域横断的に、例えばですけど、ある種の人々はここにすごく不満を持っているとかですね、クラスターみたいな考え方というか、それちょっと横串を通すような分析みたいな、そういうのももうされているのかもしれませんが、一つのアイディアとしてはあるかなということ。

- ・ しかもそれが例えば、これは年代別にされていますけど、このクラスターは、若い人でかつ女性に多いとか、あるいは中年の男性に多いとか。何かそういうことを見ていくって何かすごく有用な使い方ができると感じました。方向性というのは、ジャストアイデアでしたけども、そんなこともちょっと思いました。多分、ばらつきがあるだろうなと思ったので。

[委員]

- ・ 先ほどの続きですいません。おっしゃる話とほぼ同じなんですけど、例えば 6 ページの右側に「地域活動に参加している住民の割合は、圧倒的に地方部が高く、都市部と大きな差がある」というような記述があるのですが、事実そうなんだろうけども、実態を見ると農村部のほうが調査を取っている人が高齢者の割合が高いので、そういう数字が出ているだけで、必ずしも農村部の人たちが住民活動に参加している割合が高く、若い人たちが参加しているわけではないということもあるので、この地域で割ってしまったときの怖さで、それを地図で見たときの怖さってあるなって。例えば、姫路を含んでいる地域なんか西播なんかはですね、かなり違いがあると思うのですが、こうやって色を平均で出しちゃうと丹波はすごく進んでいて、こっちは進んでいないみたいなイメージになっちゃうので。もう少し何か丁寧な、ここだけが一人歩きしないように丁寧な分析があってもよいかなのかという気はしました。されているかもしれないんですけど、またよろしくお願いします。

[委員]

- ・ 行政区分で見ることの危なさっていうのは、結構やっぱり意識しておいたほうがよくて、例えばこの間もつい先週末ですか、大阪と兵庫の行き来はやめてくださいっていう話がありました。大阪と兵庫県で境を区切ることは、大きくは一つの目安にはなりますけど、じゃあ実際に人々の行動にどれぐらいの影響力を持つものなのかっていうのは、やっぱりちょっと違う観点が必要なわけです。
- ・ 確かに何となく、いわゆる県レベルで見たときの南側の地域と北側の地域で暮らしが違うよねっていうのは、もちろん経験的にみんな思っているところなので、それがレーダーチャートという形で出ると、何となく一瞬説得されるのですけれども。ですが、これからということを考えるのであれば、兵庫県というくくりで考える。その行政区分の枠をどう超えていくかということが、一つのテーマになるわけです。そのときにこんなにエリアごとに違いがありますよっていう情報を強調しても、これからの将来像を見にくくなるっていうところ。他方で経験的には、余り行政区分は意味がないというこ

とを生活の感覚としてあるわけですから、大阪と兵庫の例のように。そっちの道をうまくデータとして出していくってことを考える必要があるのかなというふうには思います。

[委員]

- ・ 今の皆さんの議論に加えての質問の前に一点資料を確認させてください。このビジョンの参考資料（別冊）の調査票の項目と、この総合的満足度での分析はリンクしていると考えていいのでしょうか。

[大町班長]

- ・ そうです。

[委員]

- ・ 了解いたしました。その場合、この別冊に掲載されている項目、例えば 25 番と 26 番の質問の結果が、総合的満足度として示されていると思いますが、例えば質問項目 25 番では、選択肢が 1 満足、2 まあ満足、の順ですが、総合満足度の分析では、5 が満足という選択肢となっていますが。

[大町班長]

- ・ 分析に当たって、定数を逆転化させている。

[委員]

- ・ 将来の不安についての分析もそうですか。

[大町班長]

- ・ そうです。

[委員]

- ・ もし参考資料の項目と比較すると、少しわかりにくい気がします。

[大町班長]

- ・ すいません。全体的によいというポジティブなほうを 5 点に変換している。

[委員]

- ・ 承知いたしました。もう一つ、皆さんのこれまでのご質問に加えて。ある質問項目に関して、例えばいろんな不安を持っていますかとか、あなたは健康ですか、満足していますかっていう項目に関しては、地域だけではなく、個人でもかなりばらつきがあることは皆さんよくご存知だと思います。その場合には、やはりどのような項目が幸せや満

足感に影響を与えているかをより明確に把握するためにもより詳細なデータ分析をしっかりとすべきです。単に、地域ごとにデータを分析するのではなく、地域ダミーをモデルに組み込んでその有意性を判断することで、本当にその地域が他地域と異なるかどうかを検証する必要があります。

- 例えば「将来に不安を感じますか」という項目について。一体どのような人が将来に不安を感じているのかについて、この項目を目的関数にしてモデルを作っていきます。この場合、まずは仮説を立てます。例えば「かかりつけの医師がいますか」という項目が質問項目にあるので「かかりつけの医師がいないと回答した人は将来を不安に感じているかもしれない」と考えた場合、この質問の回答がどのように人々の不安感に影響を与えているかをモデル化し、検証していくという形です。その他の質問項目の中でも人々の不安感に影響を及ぼしていると考えられる項目もあると思います。それらをしっかりと分析していくことが重要です。現状の報告書では、人々の不安感が増す理由の考察として「経済の低迷や所得格差の拡大」うんぬんと書かれていますが、そうではなく、データ分析に基づいた検証結果を記述すべきではないでしょうか。
- このアンケートでは、個人属性もしっかりと聞かれているので、それらの影響も分析することが可能です。例えば、結婚されてない方やお年寄りには不安に感じているのか。しっかりとモデルを構築し分析することによって、皆さんが感じられている「お年寄りがたくさん住んでいるから、結果に地域差が出てくるんじゃないか」といった疑問が全部払拭されると思います。
- 他の項目に関する考察の記述についても注意が必要です。例えば4ページのところの「生きがいにあふれたしごとを創る」の項目では、地方部は自営業者の人の割合が高いから、やりがいがあるっていうふうに考えているのではないかと考察しています。ただ私はこの真偽については疑問が残ります。だからこそ、個人属性の質問項目で自営業かどうか判断できるので「自営業の人々は本当にやりがいを感じているのか」についてしっかりと分析する必要があります。先ほどから皆さんが議論されているように、地域毎に結果を集計すると、どうしても何か差があるように見えてしまいます。地域差があることを示すことが悪いわけではないですが、もし明示したいのであれば、詳細な分析の裏付けがないと誤解される危険性が高くなるのではないのでしょうか。

[大町班長]

- 御指摘いただいているとおり、前提として説明が足りないんだと思うんですけども、ちょっとそこまで至ってないなっていうのが、こちらも分かっています。一応、今日の議論の糸口ということで、全体の一般的なところを記述させていただいているので、その前提を少し付ければよかったかなというところです。

[委員]

- ・ 先ほど、アンケートの回答率が全体で 5 割とおっしゃっておられましたが、回収率も地域によって差があると推察します。この差も結果に影響を与える可能性もありますので、それも含めてより詳細なデータの分析が必要だと思います。

[委員]

- ・ ありがとうございます。どうぞ。

[委員]

- ・ 県の方と仕事をしてもう 10 年近くになるのですが、政策のターゲットをやっぱりはっきりさせるっていうので、どうしても地域に投資していくか、そこに住む個人に投資していくかっていう違いがあると思うんです。
- ・ どうしても行政的にいくと、この地域を重点的にというような話になってくると、やはりその地域の中でもどこのクラスターという言葉が出たんですけど、そこに絞っていくかというところがすごく大切なのかなという意味では、やっぱりこの関連の論点の「県民の不安解消は可能か」というところで、僕もふだん地域の研究をしていますと、いわゆる現代社会ってグローバル化の中で中間層がどんどん解体して行って流動性が高まっているという中で、すごく元気のいい人に話を聞くと、ものすごく調子のいいことを言う。もういいですよと、今の時代リスクを取って元気にやっていますよっていういわゆるローカルエリート層と、あとは普通に多くの人が答えているような、そこに取り残されるような、サイレントマジョリティの層が二つに分かれるんです。いわゆるローカルエリートではない、例えば階層も学歴も低いようなサイレントマジョリティたちが、やっぱりすごく不安感を抱えているというようなことが、いろんな調査で明らかになっているんですね。
- ・ 阪大の菊川先生は、いわゆる学歴というのが一番効いているみたいな話をしていたら、その分断線がどこにあるのかっていうところと、やっぱり行政がエンカレッジしていくべきは上ではなく下だと思うので、そこにどのようにアプローチしていくかっていうのは、やっぱり皆さんのおっしゃったとおり地域も大切なんですけど、その中でどの層が一番傷んでいるとか、そこをやっぱり特定して行って手当していくっていう部分が、やっぱり政策的には重要ではないかと。そうじゃないと、何かいきなり商店街を元気にするみたいな、何かバクツとしたところでお金が使われて。でもそうじゃなくて、例えば郊外に住んでいる働きづらさを抱えている若い人たちに、個人でアウトリーチしていくというような形の政策の立て方のほうが、言ってしまえば現代的だと思うので、そういった意味でもより詳しい分析というのは必要という点。
- ・ 私の専門領域に近いところでいくと、やっぱりでもそういった意味でもひどい方向に向かっているというだけじゃなくて、いい方向もあるなと思って。例えば問 32 を見ると、自分にあった職業への就職や転職がしやすい社会だと思いますかっていうのは、これは点数、バクツとした点数だと思って、一応上がってはきていると思って。ただ、今後の方向性っていうことを考えるときに、多分これ私が神戸に来て 12 年前にこういっ

た会議でいろいろ話をしていたときと、ほぼ似たような話をしているというか。方向性としては、その頃から余り変わってないような気がしています。

- ・ だから、ある程度めざすべき方向性っていうのは、決まっていて、そこで実際にこの間、例えば就労支援であるとか、そういった若者の対策みたいなものは、ある程度訴えは来ていて、その成果もある程度出てという状態。だから、更に、ここで新しく何か価値観を変えるために新しい方向性を提示しましょうみたいな形よりは、もうこれまでの方向性はある種もう出ているので、じゃあそれでいかにしてどこにどのような形で重点的に予算を配付していけばいいのかっていう形での実装化するような、そういったのが今後より精緻な政策の実行性を高めていくっていう部分が一つ課題になるのかなというふうに感じます。

[委員]

- ・ 先生方のおっしゃることは、ごもっともだと思います。また、先程話にあったような分析はそんなに難しくないと思います。統計分析の課題として学生にやらせるとすごく楽しい課題になるかなと思います。このようなデータを積極的に公開して、学生の力を活用されるともいいのではないかなと思いました。私も人口移動データを用いて同様の分析をやっているのですが、今回は恐らく定住している人を対象としているので、一定程度そういったバイアスが掛かっていると思います。このアンケートを引き続き調査されるのだとすれば、国勢調査みたいに移住の情報も属性データとして聞いておいて、そういう情報もうまく収集されるといいかなとも思いました。
- ・ 私自身が強く感じるのは、まずは雇用さえ確保されていれば、一定程度地域の安心は確保される、つまり、最も基盤になっているのは雇用ではないかということです。しかし、レーダーチャートを比較して、都市型も地方型も雇用のカテゴリーの点数にあまり差がないのはどうしてなのか。やはり定住して定職を持っている人が主な調査対象となっているからなのか。一方で、地方はお年寄りの比率が高いことから、住環境や生活利便性のカテゴリーで点数の差がより顕著に現れているように思います。例えば、人口の流出抑制策を考える際に、今回の結果を素朴に用いて住環境や生活利便性の向上を図ったとしても、若者の雇用が確保されていなければ流出を抑制できない可能性が高いです。先程から話に上っていますが、ビジョンや政策の方向性を見誤らないためにも、こうしたデータの解釈や利用には十分に注意する必要があると思います。
- ・ ちょっと話が変わってただの感想なんですけど、私を含めた多くの先生方が40代だと思っんですけど、40代は厳しいなって言うのが今回の結果から改めて見て取れて、中核を担う年代であると思っんですけども、非常に苦しいなっていうのがいずれの表からも分かる。ちょっとその辺は個人的に改めて認識しました。

[委員]

- ・ いろんなこういう県のお仕事とかをお手伝いさせていただくようになって、いろんな統計とか調査を挙げているのですけれども、そろそろですね、ITインフラに関しての

調査をしたほうがいいのではないかと考えておまして。こういう主観とかどう感じるかというのは、結構情報量によるところが大きいような気がしていて、テレビしか見ていない人とネットとかそういうものでいろんな情報を集めている人で、感じるところがかなり違うと思うんですね。

- ・ 今回の例えばコロナウイルスの騒ぎとかに関しても、ネットとかで情報を集めている人は、かなり敏感に対策を取ったりだとか、そういうのを求めたりだとかいろいろすると思うんですけども、テレビばかり見ている人だと何かあんまり差が激しいと言いますか、テレビは大体根本的なことを言わないで不安ばかりあおってくるので、極端な対策を言ってくる人と、別にほとんど死なないらしいからとか極端なことを言ってくる人と、情報って結構与えるものに差が出てくると思うんですね。こういう調査の中で最近そういうことが出てきたというか、情報がだいぶ人を動かしたりだとか影響を与えたり、判断に与えたりするっていうのが段々明らかになってきたので、これまでは余り調査されてなかったかもしれないですけども。
- ・ 例えば、各家庭に簡単に情報を大量に届けられるようなWi-Fiの環境があるかどうか、そういうことって以外と分からないんですよ。さっきの何でそう思ったかという、今大学のほうで授業をいつ開始するのだとか、開始しても遠隔授業をできないかとか、いろんなことを言われていて、大学の中にはそういう設備とかを整えていただいているんですけども、発信する側はそうなんですけども。受信する側の学生さんたちと。いや、うちはWi-Fiは無理よと、スマホは持っているけれどもと。スマホに向かって授業配信したらもう1週間で彼らの1カ月分のデータを使い切ってしまうので、現実的に無理なんですよね。1週間も多分分からないですね。彼らは、そんなにお金がないので、安いデータプランとかで契約しているの。何回か多分授業を配信したら、もう遠隔授業ができなくなっちゃうんですね。そうすると、今度は授業が平等にされないのではないかということになるので。じゃあ遠隔授業は無理っていうことになってしまう。
- ・ そういうときに、だから例えば衛星授業っていうか、そういうのを受けられるような例えばネットカフェでも何かそういうインターネット利用の何かテレワークできるオフィスでも、そういうのがあるとかないとかっていうのが、何か地域の差とかにも今後なっていくとも思う。ITインフラに関する調査というものも今後考えていかなければいけないんじゃないかなと。特に、今だからその全部の小学校から大学まで何ていうか遠隔授業だとか、そういう通信の活用だとか、家庭でのそういうネットを利用した学習だとかそういうことを始めなきゃっていうか、真剣に考えなきゃいけない段階に来てるので。この機会に考えてみたほうがいいんじゃないかなと思いました。

[委員]

- ・ ありがとうございます。一通り発言していただきましたけれども、少しだけ第一ラウンド最後に。

- もう皆さん、御発言されたことは私もああそうかということが多かったんですけども、最後におっしゃったITインフラの調査というのは、やっぱりこれから本当に重要だと思うんですね。事務局と議論したときに、限界費用ゼロ社会というのが最近キーワードのように言われることがあったんですね。これは何を言っているかと言うと、一つはですね、IT、IoTがもう市場に取って代わる時代がもうすぐやってくると。経済学者にとっては非常に厳しい。本当にそれが可能かというようなことを議論しているんですけども。それは社会評論家の話ですので。そこまでいかないしても、ITとかIoTと言われているものが社会をものすごいスピードで変え始めていることは、もうはっきりしていて。何となくそれはそれと思っている節が、中高年層以上はあるような気がするんですね。
- 若い人たちは、ものすごく敏感にそれに反応しているということもありますので、ぜひとも何かそういう要件、不可能なという状況を、現時点での状況を正確に把握しておいてですね、それが将来に向けてどういう政策になるのかは私には分かりませんが、何か一つの重要なポイントにはなるのかなという気がいたしました。
- それと、8ページのところでまとめを書いていただいて、これまでの県の調査で、拝見したときには、ああこういうまとめだなというふうに見ていたんですけども、ちょっと見直すとかじっと見ているとなかなかおもしろい整理をされているなということに気が付いたんです。最近、政府の経済産業研究所が幸福感に関するレポートを出した。
- そのディスカッションペーパーを見ると、従来から一体何が幸福の要因だっているのはたくさん議論があって、健康とか、それに関わっているいろんなことが分かってきたんですけども、そこで強調されていたのは、選択できることという、これまでとはちょっと違うキーワードが出てきて。しかも、確かね、ぱらぱらと見ただけだけでも所得とか健康よりも、上位にある。要するに、人が選択するという行為がものすごく充実度、満足度、幸福度につながっているという、確かそういう結果だったと思いますね。それを見ながらこのまとめを見ていますとね、例えば「1 都市・地方の暮らしの再構築」というのは、もしかするといろんな意味での選択を人々が、県民がし始める。地方に行くという選択もあるし、都市に行くという選択もあるしというようなことと絡められるかなと。
- 「2 AI時代の稼ぎ方と人材育成の展望」、これは所得にダイレクトに結び付いてきて、「3 人生100年時代のライフコースの提示」というのは、もしかしたらそのレポートから言うと選択のところに入ると。「4 巨大災害や気候変動への対応」というのは、健康というのを安全・安心と絡めると、健康領域、安全・安心というようなところに組み込めるかなというふうに読めるかなと思って、これ拝見していたんですけどね。そうすると所得というのは大変重要で、仕事というのが非常に、どうも面白い位置付けになりそうだというのは、非常に重要なポイントだと思うんですけども。それに加えて、安全・安心・健康、あるいはここでたまたま大ざっぱに中身がよく分からずに分類

してみたのですが、選択という項目をこの中に入れ込めば、何かそういう見方がこのまとめはできるのかなという気もいたしました。これは、単なるコメントです。

- ・ そこでちょっとお伺いしたいのですが、こういう県民アンケート、県民の今の意識を吸い上げる、整理するように作られているんですけども、そのプロジェクトというか会議は 2050 年の兵庫県の姿と言いますか県民の豊かさ、満足度を議論しようとしているのですが、こういう現時点での県民の意識をどういうふうにしたら 2050 年に投影していきえるのだろうか、そういうのが一点。
- ・ それともう一つは、これはそういう県の皆さんに聞きにくいとか言いにくいけれども、非常時、特に今回のコロナがそうだったと思うのですが、一般の人が思っていることとは違うことを、やはり政策当局というのはいけないということがあろうかと思うんですね。兵庫県の経済状況を考えると、もう現時点でそういうふうになっているとも思うんですけどね。こういう県民の皆さんの御意見と、県民の皆さんは嫌がるだろうけれども、あるいは県民の皆様は違うだろうと思っていることをもしなければならぬような事態も多分あるだろう。そういうのをこういう調査と対応させて、どういうふう考えたらいいのかなという質問なんです。

[ゲスト]

- ・ 2 番目のご質問は非常時にこのデータが何に活用できるかということですか。

[委員]

- ・ 非常時というか、今兵庫県を含めて日本の社会というのは、相当厳しいところにあるかと思えますね。超高齢化にあって、世界でもそれこそ経験したことのないような状態に日本社会があるわけですね。それと連動する形で経済力なんか、どんどんどんどん転がり落ちていっていると。日本社会は孤立しているというか、海に囲まれているので孤立かどうか分からないけども、あんまり危機感ないようにも思うんですね。もう本当にちょっと海外に出てみたら、日本の社会というのがいかにのんびりしているのかっていうか、いいか悪いかは別にして。僕らなんかは、やっぱり 80 年代、90 年代に仕事してきましたので、これはいけないだろうというのが強いんですけどね。それに対して、兵庫県が豊かになるためには、やはりそういう高齢化というのをうまく使いながら、より活力のある方向に持っていくということかなとも思うんですけども、そんなことを言うとまた成長という言葉を使うなという声が聞こえて来そうなんですけれども。そんな複雑な思いで今ちょっとお伺いしたんですけども。

[ゲスト]

- ・ 答えになるかどうか全く自信はないのですが、まず 1 つ目の 2050 年を見据えているということですが、確か最初は 2030 年が目標年ですよ。それが 2040 年に置き換えた改訂があって、この調査は最初から行われていましたから、上手に引き継いでいくことには苦心しました。というのは、せっかくのデータですから、それを活用していったほ

うがいいわけです。その時点で、今日意見を出されたように政策形成のためにということになっていけば、そういう流れもあったかもしれません。今回、どこまで政策とこのビジョンの議論を結びつけられるかは見えてないんですけど、しっかりとくっつけるということであれば、皆さんがご指摘された分析には意味があるなと思っていますね。

ビジョンが、やはり県民をどう巻き込むかが大事だという形であれば、それをもっともっと積極的に取り入れたほうがいいだろうと。どちらかと言うと、主体性を構築するよりは、どうだったんですかっていう割と後ろ向きというか、後で追い掛けるみたいなそういう形のものなんです。ですから、どういう質問を入れるかを論じることは大事だと思います。

- ・ コメントの中で触れた社会的共通資本や基本的な生活の基盤として、情報インフラがあると思っています。福祉へのアクセスとか、保健医療のアクセス、経済活動へのアクセス、そして情報アクセスがある。これらの項目は、重要度が高いと思える。この点については 2050 年でも重要じゃないかというような議論をされ、そこをちゃんと設定していくのが大事です。個人単位の分析もできるし、それが地域単位でどう偏在しているのかも把握できると思うんですね。
- ・ それと、もう一つ、このビジョンのユニークなところは、地域性です。兵庫県全体としての地域性も担保できたらいいですし、どうフォローするのが大事です。県民の不安も、また反映されていくという気がしますね。
- ・ もうひと言だけ言わせてもらおうと、社会的共通資本がどうなっているかを担保できるかどうかで、その人の生活のチョイスが変わる、まさに選択の話です。選択というのは、恐らく自分自身の生活をどうコントロールできるかという自由度につながっている。自由度は、幸福や生活の充実との関連が強いと思います。
- ・ どういう構造でビジョンを組み立てるか。ビジョンの目的は何かは、やはり重要です。テーマも大事ですけど、ビジョンを見れば、一人一人の県民の生活の基本的な支えがしっかりできるぞっていうところを見ていけるというように。豊かさまたいな点を、住民自身が見て、自分で使っていけるものになったらいいんじゃないですか。
- ・ 「健康診断」みたいなものですね。自分の血圧がオッケーなのと、できたらもっとシェイプアップして、人によったら体脂肪率を絞りたいとかあるじゃないですか。それらは、人それぞれの価値観もあるし、どういった方向で行こうかみたいなことも言えるし、そういったものがこういうビジョンの取り組みでも仕組みとして組み込むことができたなら、県民が面白いなと思って見るんじゃないかなという気がしました。

[委員]

- ・ 資本という言葉が出たので、経営の分野でどういうふうに組織が強くなるかが私の研究課題なのですが、やはり資本はすごい大事な考え方で、今先生がおっしゃったような社会インフラとか IT インフラも含めて、これを経営学では経済資本と呼ぶんですね。そのものが経済活動に反映されるようなお金とかも含む、土地とかも含めてですけど。

- ・ でも、何かそれだけじゃないという議論で、これは経済学の考え方ですけど、人的資本っていうもう一個の資本があって、やっぱり教育も大事だし、知識も大事だし、何を知っているかっていうノウハウとかも大事。多分、近代の日本って、ここをすごい頑張ってきたと思うんですが、経営学の中でも少しずつ強い企業ってそれだけじゃなくて、実は他にも資本がありそうだっていうことで、これは社会学ですけど社会関係資本っていうつながりだったり、地域のコミュニティーだったり、人から信頼されているとか。お金がなくなったら銀行が信頼してくれてれば家を建てられるというような話ですよ。
- ・ 最後に、これ私の研究テーマでもあるんですけど、実は個人とか職場とか組織のパフォーマンスって、これだけでも 100 パーセント説明できなくて、再度出てきたのが心理的資本っていう考え方で。これ 2000 年以降なんですね。
- ・ これは、すごくミクロなものでありながら、すごくマクロにも影響するんですけど。要は、どれだけ心の豊かさとかしなやかさみたいなものを持っているかということで、実はここがすごく重要になってきているのが、まさにリンダ・グラットンさんの 100 年時代の構想が出てきてから、知識って劣化するし、人間関係って劣化するけど、心の中がある程度健全な状況であれば、それを維持したりとか、社交の場に出て行って元気にお酒を飲んだりとか、そういうことが維持できるという。
- ・ つまり、いろんな資本を更新していく資本みたいな、メタ資本っていうんですけどね。何かこういう考え方が出てきて、私は実際にエンピリカルでいろいろ調査しても、これすごい大事なファクターなんです。活躍している企業とか、活躍している個人とか、どのレベルで見ても。なので、これで私は今ちょっと項目の提案をしているのか、ビジョンの提案をしているのか、自分でもちょっと微妙なところだと自覚しているんですけど、何かこういうようなある種の心の豊かさとか県民の皆さんがちゃんと自分に自信が持っているのかとかですね、例えば。あるいは、未来に希望があるとありますけど、それは実は大事な心理的資本の一つなんですね。
- ・ 何かこういうものって調査項目としても大事だと思うし、あるいは議論する中身として、やっぱり豊かさっていうものの中身の一つだと思うんです。お金を持つのも豊かさだけど、心に余裕があって信頼関係を結ぶのも豊かさなんですね。こういう豊かさの概念を少し拡張して行って、その中で何をフォーカスできるのかと。例えば、強いコミュニティーって心理的資本を育てるっていう結果も出ているんですね。というふうな、別にだから決してビジネスだけじゃないと私は思っている。何かこういうような豊かさの拡張、資本っていう概念の拡張みたいな、何かそんなことが少し論点になり得るのかなと思いました。

[委員]

- ・ 行動経済学などの。

[委員]

- ・ そうですね、まさに。

[委員]

- ・ 利己主義が基本だったけれども、利他主義というかが非常に重要な人間行動の要素になっていると。あるいは、社会的に何とか、社会的姿勢とか何か行動経済学で何かそういう言葉を使って説明しているようだけれども。
- ・ この辺りは、それこそ危機的状況が起きると災害とかね、人間のそういう領域が拡張して出てくるということが言われていますけども、そういうのをうまく刺激したり、何かソーシャルキャピタルの中でうまく拡張できるような仕組みがあればいいですね。顕在化させるというか。

[委員]

- ・ そうなんですね。

[委員]

- ・ 一番目の進め方の部分ですが、それはまた次回ですかね、今回のテーマですかね。

[委員]

- ・ お願いします。

[委員]

- ・ 地域ビジョンの作り方ですね、これは基本的に今までと同じことをやるっていうイメージでいいのかどうかっていうのと、そのやり方が本当にいいのかっていうのは、すごい僕もフェーズで関わらせていただきながら思っているところで、書いていることを読ませていただくと、同じような感じかなというふうに読んだんですけども。
- ・ 先ほどから皆さんおっしゃって、僕も最初にお話ししたとおり地域で県民局とか地域で課題をまとめていくっていうことが、どこまで意味があるのかというのは、もう一度考えてもいいのかなと。ただ、地域単位で考えるにしても先ほどのお話、クラスターとあっていう話もあったと思うんですけど、例えば2市しかないところですね、多分議論をたくさん書いていると思いますけども、そこで県の地域ビジョンを立てるときに、前と同じように何か集まってきて、地域の未来を掲げましょうみたいなことをやるよりも、何か政策をもう少し限定したりとか、テーマを限定して集まってもらって、市町でできてない部分の整理とかですね、県でやるべきことは何なのかとかね。
- ・ また、市町で作っているビジョンを最近ちゃんと作っているところもありますから、そこから、ある程度はもうそれでオーソライズ、何て言うのかな、分権でオーソライズしてしまって、そこから先でどこが抜けているからここをやろうみたいなことを、ちょっとやっていってもいいんじゃないのかなっていうのも思ったりとかですね。

- ・ あと、それがその地域を越える、大阪・京都っていうのが前からもあるけど、それはちょっと難しいにしろ、もう少し県内の中でも広い単位で議論したほうがいいこともあるだろうということも、ちょっと思っていますというのが一つです。
- ・ もう一個、関連してですけど、そのビジョンが手段なのか目的なのかみたいな話も多分あると思いますので、そのビジョンを作ることを通して、そういうグループを作っているのか、アクションを生み出していくみたいな視点を。前からそういうふうにやられているのも承知しているんですけども、その辺りも既存でかなり、例えばITならITのグループが既存である程度地域を超えてネットワーク化されているところに、ビジョンっていうものをちょっとコラボさせていくような形のビジョンの作り方とか、何かもう少し多様性があってもいいんじゃないかなというのが意見です。ちょっとすいません、言い過ぎているかもしれませんけど。

[委員]

- ・ これまで、県は地域ビジョンに随分力を入れて、これは最初に前の長期ビジョンですかね、作る時は県の全体の長期ビジョンというのは極端に言うと地域ビジョンをホッチキスで止めたものでいいというような、県もそのように確か言っていた気がする。各委員からもね、そんなことを、やっぱり地域を大事にしろと。そういう意味では、いろんな経緯があろうかと思しますので、今の御指摘は、そういう在り方をもう一度再度見直せという非常に重要な御指摘だと思いますので、この辺りは県も是非とも御検討いただいて。

[委員]

- ・ ちょっと今データを見ていてすいません。ちょっと先ほどから出ているクラスターの話って、ちょっとイメージしにくいかもしれないんですけど、私も後ろを今見ていたのが52ページの子育てしやすいかどうかのところです。これ地域別で見ると阪神北と神戸と、あともう一個、東播磨が子育てしやすいって行って。まあ、そうだろうなっていう感じなんですけど。でも、実際合計特殊出生率は、このエリアは多分低いんですよ。ですから、単純に子育てしやすくすれば、合計特殊出生率は上がるだろうということではない。だけれども多分子育て世代が持っている共通の課題というのはエリア越境であって、そこにやっぱりアプローチしないといけないと思うんです。だから、その発想で考えていかないと、どこに強みがあって、どこに弱いものがあるのかっていうことは分からないわけですからっていうことで、何か一つ新しい軸っていうのを考えたいなっていう、そういうアイデアだというふうに思います。

[委員]

- ・ 地域割りっていう先ほどの話と、何かITインフラのこととかちょっと今日話しているんで、このITインフラで言うと、もう地域で絶対やれないような金額の設備投資とかもしなくちゃいけないので、例えばだから5Gに対応していただくか、それが

ら何百人も一斉にアクセスして授業を受けられる。例えば大学だったらまだ 100 とかの単位でいいと思うんですけども、高校とか中学校とかこれから今後ですね、あんまり考えたくないですけど外出禁止だとか、そういうのが割と頻繁に起きるようになってきたときに、整えておかなきゃいけない I T インフラって、もう市町村の単位でなくなると思うんですね。そんなふうになってきたときとかは、やっぱり他方、何て言うか地域に頑張れとか、上から指示を出してあとは自主性に任せますっていう感じだと思うんですけども、自主性ではやれない範囲のことって特に I T でやっぱり起きると思うんで、そういうの何て言うか柔軟にやっていくのがいいかなと思いました。

- ・ 当然いろんな、たくさんの情報を与えて、だから生き方にも何かいろいろ多様性があるんだよとか、職業もいろいろあるんだよとか、そういうのがだから安心感につながってきたと言いますか。ここの地域にいたら、何て言うかこういう産業しかできないんだとか、有名な会社がないから駄目なんだって思わなくても、例えばだから広いところで伸び伸びと動画の編集をしているだけでも食べていけるだとか、そんな世の中です。いろんな職業があって、いろんな食べ方があって、多様だっていう情報も大事だと思うので。
- ・ そういうことで、今回、I T インフラの必要性がみんなに実感してもらえるまたとない機会になっていると思うので、そういうときに調査をしたら、割と正確な値が出てくるのではないかなと思いました。自分の地域はスマホを持っているという人は、まともに遠隔授業も受けられないんだらうとか、せっかく大学へ入ったのに何か時差通勤しなきゃいけなくなったから、何か割と不便な地域の人とか。何かいろんなことが正確に出てくるいいタイミングだと思いますので、ちょっと考えてみたらいいのかなと思いました。

[委員]

- ・ I T インフラが徹底して作られたら、まず産業構造は大きく変わっていきますよね。更に地域構造も変わっていきますよね。例えば、産業構造で一番変わるの教育だと思うんですけどね。もはや、大学のキャンパスが必要ないという、そういう動きも世界では出始めていますよね。
- ・ あるいは、製造業そのものも 3 D プリンターを使えば、神戸でソフトウェアを持っている人が発信すれば、但馬でその機械から出てくるという。もうそれ十分可能になり始めているんですね。ちょうどいい結節点だっていう議論が、いろんな評論家も含めて動き始めている。

[委員]

- ・ 本日の関連論点 2 のところで、不安の解消は可能かという話ですけど、これからの時代は世界的にも不安定な時代になると言われています。これまでみたいに資本主義とか自由主義とか民主主義とか、一応その方向に答えがあるのではないかという、そういう物語が崩れかけていて、不安を抱えながらいかに生きていくかという時代と認識してい

ます。そうした中で、県が不安を解消するっていうのは、本当になかなか難しいゴールだと思いますね。

- ・ そうした中で、先程の話にもあったように、いろんな状況の変化に柔軟に対応できること、また、その基礎となる広い意味での資本、それは教育やIT化、心理的資本もそうだと思うのですが、それらが重要になるのではないかと思います。直接的に不安を解消するというよりは、その不安に打ち勝つ生命力を兵庫県がしっかりと育て教育する、あるいは、その基盤をしっかりと整備していく、それしかないのかなというのを今日の議論の中で考えました。以上です。

[委員]

- ・ 今までのビジョンというのは、県政の指針ですので、どうしてもマジョリティを対象とした、というか、社会基盤の整備計画といった大きな方向性を示すものだったと思います。ただ、先ほど少しお話がありましたけれども、やっぱり今後はビジョンも「個人」に着目するべきではないかと思っています。その中でも、今まで取り残されていた人々というか、例えば行政支援の狭間にあって、なかなか注目されにくかった人々について、しっかりと考えることが重要なのではないかと個人的には考えています。だからといって、行政がその人たちへの支援を広げるのではなく、SDGsじゃないですけども、例えば地域住民や企業などと連携しながら、そういった人たちの生活を底上げしていくといった姿勢を私たちは作らないといけないと思います。ビジョンも、ただ社会基盤を整備することではなく「個」にしっかりと寄り添っていることをアピールするのが重要なのではないかと。それによって、不安感というのが払拭できるのではないかと考えています。
- ・ 例えば、今の穏やかな生活が未来永劫続くのか、と考えたときに誰も「将来が保証されていない」という不安感を持っていると思います。もし今後、何か悪い出来事があって、ぽんと自分の仕事や生活が切れたときにも、そこをしっかりと救ってもらえれば、多分不安感というのは幾分か払拭されるでしょう。SDGsでは「一人も取り残さない」ことを目標の一つとして掲げていますが、県としても今まで見落とされがちだった人たちを「実は私たちの兵庫県はしっかりと見ていますよ」とアピールすることが、最終的には人々の幸せを高める、換言すれば人々のQOLを高めることにつながるのではないかと考えています。
- ・ 先ほどからデジタル化のお話も出ていましたが、デジタルディバイドに見られるように、情報提供の基盤整備を進めるだけでは片手落ちです。基盤整備をやりながら、その利用者一人ひとりにも寄り添っていかないといけないのではないのでしょうか。この両輪をしっかりと回していくことを、ビジョンで明示することは、重要な観点の一つではないかというふうに感じました。

[委員]

- ・ ソーシャルキャピタルの理論なども。

[委員]

- ・ そうですね。

[委員]

- ・ 個人のケイパビリティとか潜在能力に焦点を絞った、ある程度普遍性を持った政策パッケージというかアプローチっていうのが、多分県とか国のレベルでは求められているとは思うんですね。
- ・ ただ、先ほど来話があったように、それでじゃあ、一つのある程度の統一的なパッケージを使ってやっていくと、またちょっと逆の話でいうと、でもやっぱり地域の特殊性は残っていて、そこがやっぱり例えば県ではなくて市レベルの、ものすごく小さな自治体レベルでの特殊性も加味した政策というのが必要になってきて。だから、その二つをうまく具合に折衷させるというか、そこをどこまで普遍性、どこまで特殊性でうまく政策を作っていくのかっていうのが、今後の一つの大きな課題になると思うんです。そこは、すごく難しい。こっちに振り切れればいいっていう、どっちに振り切れればいいっていう話じゃなくて、個も地域も両方、バランスの取れた一つのパッケージというのが一つ必要だなと思いました。

[ゲスト]

- ・ 普通に生活をしている人たちにとっては、ビジョンという言葉はなかなかなじみはないでしょうね、日常で。でも、自分の暮らしをどう立てようかは、みんな日常考えていることなんですよね。だから、この2つをどう接近させたらいいのかっていうのが、新ビジョンの大きな課題じゃないかと思っています。地域ビジョンをどう作るかっていうことで申し上げると、但馬の新ビジョンづくりに深く関わりますが、そこでは、今指摘されたような地域で何が起きているかをもとに組み立て、積極的に地域の人たちに作っていってもらおうという姿勢でいくと宣言しています。なぜそうすべきかという、これまで、そこにたどり着けてないことが多いんですね。市町村との協力関係の課題、行政のタイアップです。具体的にどうタイアップできるのかっていうことにチャレンジしてみようと。今日皆さんのお話を伺っていて、地域ビジョンを積極的に地域目線で取り組んでいくことに価値があるということで、意思疎通できたような気がします。皆さんの意見を聞いていて、次の時代を見据えて、新ビジョンをどう作るのか、もっと積極的に行政の政策にどう関係づけていくのかという意見がたくさん出たのが、非常にいいと思いましたし、将来構想研究会のまとめがどうなるのか心待ちにしています。データが蓄積されたことの価値はあるなど、率直にそう思いましたし、最初から調査されてきた県の職員の皆さんに感謝しています。兵庫県民として。

(4) 水埜部長挨拶

- ・ 今日もいろいろな御指摘・御意見ありがとうございました。特に県民意識調査の分析が、我々この最後のページのまとめで方向性を出すために、無理やり強調したような分析をしておりましたので、ちょっと足りない部分もあったかも分かりません。とにかく20年近く積み重ねてきたデータでございますので、これからも大事に生かしていきたいと思えます。
- ・ それから、これからのビジョンの作り方は本当に難しいところで、どうやったらいいんでしょうかね。2050年に年次が進むだけではなくて、もう作り方自体が前回は計画からビジョンへというので新しい切り口を出したんですが、次はポスト参画と協働、前回は地域ビジョンの総和が全県ビジョンだと言っていたんですが、今度はちょっと逆なのかなど。この検討会である程度素材、進むべき道筋を示して、それに基づいて地域でも語り合っていただこうと思っています。地域ごとのつくり方は、本当にもうばらばらでもいいのかなと思っています。画一的なものではなくてもいい。全県ビジョンが中心で、各地域はそれに応じて必要なものをちゃんと議論してもらって、地域のために必要な事業を取り上げるようなものを作っていただいてもいいのかなとも思っています。その辺り、新しいビジョンづくり、4月以降、本格的に動き出しますので、先生方にもほぼ10カ月間で10回の会議、毎月お集まりいただきますが、来年度もよろしく御協力のほどお願いいたします。ありがとうございました。